

大学生の異校種理解への実態を踏まえた保幼小連携に関する研究

南 方 都 邑*

Research on the Cooperation between Nurseries, Kindergartens and Elementary Schools
Based on the Actual Understanding of Different School Types by University Students

Tomu NAMPO*

はじめに

幼小連携について、その重要性は以前から語られてきた。直近では、平成29年に告示された、幼稚園教育要領等や小学校学習指導要領改訂で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記され、令和3年に、文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会において、幼児教育の質的向上及び小学校教育との円滑な接続について専門的な審議を行うために、「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置されるなど、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の重要性は増している。

しかしながら、保育所、幼稚園、小学校による解釈や意識の高さの違いや、交流の機会を持てる時間がないなど、課題が多く存在することは先行研究で明らかにされている。また、保育所、幼稚園、小学校、それぞれ特有な語句が存在することも、先述した分科会において挙げられた。さらに、教員になる前の学生の段階から、保幼小連携についての関心がないということも挙げられ、今井（2018）においても、「幼小接続という観点が幼稚園教員や小学校教員になってから取り組むべき課題ではなく、養成段階から取り組むべき課題」と述べている。

筆者が大学4年間を過ごしてきた中でも、児童教育コースの学生が、保幼小連携についてあまり興味を持っていないように感じるがあった。例えば、教育実習後の校種間交流において「遊び」が話題になった際、児童教育コースの学生は「遊び」を休憩時間の遊びと理解していた。一方で、幼児教育コースの学生は「遊び」について、環境を設定したり、学びの場を作ったりと工夫されたものだということを前提に話していた。ここに相互の認識の差が生まれていた。このような認識の差がある状態では、実際に現場で保幼小連携を考える際、話している内容がかみ合わないということが起きると考える。そのため、大学生の時点で、異校種に関するある程度の理解が必要であると言える。

保幼小の接続の重要性は、幼児教育を生かすこととされており、菅沼（2021）は、「小学校が、幼児教育での遊び経験を、蓄積されてきた学びであると理解し、生かすことができたときに、本当の意味での保幼小の接続がなされ、子どもを中心とした円滑な接続となると考える。」と述べている。木村（2019）は、「小学校の教育には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて指導を工夫することにより、小学校教育が0からのスタートではないことに加え、主体的に学べるように工夫することが求められる」と述べている。しかしながら、これら

* 本学教育学部教育学科初等教育専攻4年

の主張点については、異校種への理解がないと、実際に行くことは難しいと感じる。異校種への理解は、異校種にかかわる教育課程の講義を履修しない限り学ぶ機会がなかなかない。また、児童教育コースの学生が、幼児教育や保育・幼児教育が始まる前の乳児保育に触れることは、小1プロブレムの解消やカリキュラムの編成に役に立つだけではなく、児童教育自体の質の向上や、新たな視点の獲得にもつながっていると筆者は感じている。

以上のことから、本研究の目的は、小学校教員養成課程に在籍している学生の保幼小連携への認識や理解についてアンケート調査の実施及び保幼小連携の先行実践事例を概観することを通して、小学校教員をめざす学生が幼児教育を学ぶことの意義を改めて示し、小学校教員に必要な異校種理解への示唆を得ることである。

1 研究の方法

第1に、小学校教員養成課程に在籍している大学生を対象に幼小連携に関するアンケート調査を行い、幼児教育への関心や意識について実態を調査する。第2に、幼児教育と児童教育の認識の違いについて整理し再考察する。最後に、保幼小連携について総括し今後の在り方を考察する。

2 学生への意識調査の概要

(1) 調査の目的

小学校教員養成課程に在籍している大学生の幼児教育への関心や意識について実態を明らかにする。

(2) 調査方法

Microsoft Forms を用いてアンケート調査を実施した。

(3) 調査対象

広島文教大学教育学部教育学科の小学校教員を志望している学生を対象とする。

学年については、本学の保幼小連携について深く学ぶ「学校間連携」(4年次受講)との関連を考え、既に履修している4年生を除く。また来年度すぐにカリキュラムの変更が可能ではないことを踏まえ、3年生への質問調査は意味をなさないと考え除外する。以上を踏まえ、1・2年生を対象とした。

(4) 調査日時と回答数

①2022年6月13日(月)

1年生への調査実施：回答数130名

②2022年7月27日(水)

2年生への調査実施：回答数79名

*一部、3・4年生で3名の回答を得た。

以上の調査において、計212名の回答を得た。

(5) 質問項目

進路、取得予定免許、保幼小連携に関する語句を説明できるか、保幼小連携が必要かとその理由、保幼小連携を学ぶ意義と理由について全9問の質問から調査した。

3 学生への意識調査の結果と考察

図1に回答者の属性を示す。回答者のうち、

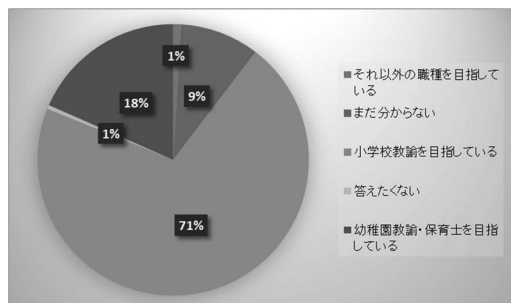


図1 回答者の属性

小学校教諭を目指している学生を学年ごとにまとめる。1年生は80名、2年生は67名、3年生1名、4年生2名であった。

図2は、質問「次の言葉について意味を説明できるものをすべて選択してください。（複数選択可）」に関する集計結果である。

【選択肢】

- ・保幼小連携
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
- ・小1プロブレム
- ・アプローチカリキュラム
- ・スタートカリキュラム
- ・すべて分からない

「保幼小連携」は123名、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は21名、「小1プロブレム」

は71名、「アプローチカリキュラム」は9名、スタートカリキュラムは38名、「すべて分からない」は68名、という結果であった。次に各コースで集計する。回答者のうち、大学1年生は82名が児童教育コース、36名が幼児教育コースとしている。2年生は78名が児童教育コース、1名が幼児教育コースであった。以下、児童教育コース160名、幼児教育コース37名の集計を表1に示す。

さらに、児童教育コース1年生82名、2年生78名に絞り詳しく見ていく。「すべてわからない」のうち、児童教育コースの学生は50名で1年生が40名、2年生が10名である。次に「保幼小連携」については、児童教育コースの学生は93名が説明できるとし、1年生は32名、2年生

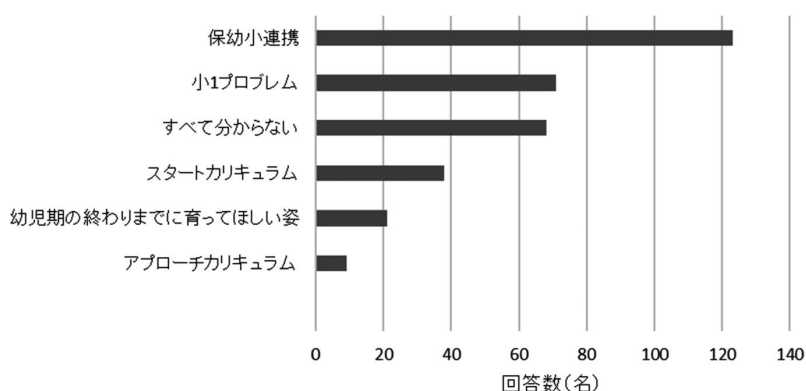


図2 質問「意味を説明できる語句」に対する集計結果

表1 「意味を説明できる語句について」に対するコースごとの集計結果（名）

コース		児童教育 コース			幼児教育 コース
学年	全体	合計	1年	2年	合計
保幼小連携	123	93	32	61	30
幼児期の終わりまでに育って欲しい姿	21	13	2	11	8
小1プロブレム	71	59	18	41	12
アプローチカリキュラム	9	8	7	1	1
スタートカリキュラム	38	29	11	18	9
すべて分からない	68	50	40	10	12

は61名が説明できとしている。また、2つ以上の事柄を組み合わせてクロス集計を行ったところ、2年生になると「保幼小連携」と「小1プロブレム」の両方を説明できる学生が増え、1年生で8名、2年生で30名であった。さらに、小学校に特化して考えると、「保幼小連携」と「スタートカリキュラム」の両方を説明できるという学生は29名おり、1年生が13名、2年生が16名であった。しかし、「アプローチカリキュラム」についての理解は顕著に乏しい。児童教育コースの学生は8名が説明でき、そのうち1年生が7名、2年生が1名であった。また、「幼児期の終わりまでに育て欲しい姿」については、児童教育コースの学生は13名が説明でき、1年生が2名、2年生が11名であった。また、クロス集計によると「スタートカリキュラム」と「アプローチカリキュラム」を説明できる児童教育コースの学生は7名で、1年生が6名、2年生が1名など表裏一体の言葉を両面から理解している学生も少ない結果となった。

以上を踏まえると、「保幼小連携」、「スタートカリキュラム」、「小1プロブレム」という小学校に入学後に関連する語句について理解している学生が多いことが分かった。反対に、「アプローチカリキュラム」や「幼児期の終わりまでに育て欲しい10の姿」など、幼児教育に関する語句への理解は乏しいことが分かった。

次に、図3は「保幼小連携は必要だと思いますか」（5段階尺度）という問いに対する回答の内訳を示している。

表2より、学年が上がるごとに「必要である」と思う人数が増えている。そのことから、保幼小連携の必要性に気づいていると言える。

次に、「保幼小連携は必要か」という回答の理由を記述方式で訪ねた。その結果のなかから、児童教育コースの学生の記述内容をまとめる。

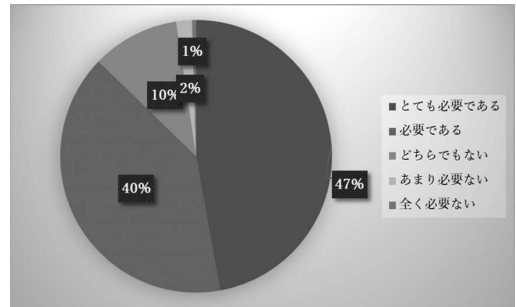


図3 「保幼小連携は必要か」

表2 回答別の学年の内訳

	1年生 (82名)	2年生 (78名)
とても必要である	25名	51名
必要である	38名	25名
どちらでもない	16名	1名
あまり必要ない	3名	1名
全く必要ない	0名	0名

(1) 【とても必要である】(回答数76名)

1年生23名、2年生50名、未記入3名、計73名の回答を得た。記述内容の有効数は72名であった。

1年生の記述には、「連携」(4名)という言葉とともに「つながり」(7名)という意味合いの言葉が多くみられる。また、「ギャップを減らす」、「スムーズに小学校生活に慣れるため」など、小1プロブレムを解決に関係する記述も多い。さらに、「子どもの理解」や「幼稚園・保育所で学んで行ってきたことを知るため」という意見も多くあった。2年生の記述には、「連携」という言葉とともに、「スムーズ」(7名)「小1プロブレム」(3名)「ギャップ」(5名)や「環境が変わる」など具体的な言葉が増えた。また、子供を中心に捉えており、「子供のために」という記述も多い。子供の理解のために必要など、連携の効果についても述べている。

(2) 【必要である】(回答数63名)

1年生31名、2年生22名(未記入10名)で、53名の回答を得た。記述内容の有効数は53名であった。

1年生の記述では、「とても必要である」に比べて、「した方が良くと思う」「なんとなく」といった曖昧な記述が多くみられる。また、「つながり」という記述より、不安を取り除くという意識の方が強い。しかし、全体的に理解が浅く、「教えやすくするため」「幼・保の感覚が残っているから」「子供に幼保みたい部分があるから」といった自身が指導する上で不安があることが感じられる。2年生の記述では、「とても必要である」に比べて、「損はない」や「大切だから」といった具体性がなくなった。また、漠然とした「良いと思うから」という記述も多い。さらに、「小学校の業務の中でも、保幼小連携は優先順位が低いもの」という見方や「話題だから」という記述もある。

(3) 【どちらもない】(回答数17名)

1年生15名、2年生1名、未記入1名で、16名の回答を得た。記述内容の有効数は16名であった。

記述では、「分からないから」、「よく知らないから」(14名)という回答が半数以上を占めている。また、その回答者は1年生であった。

(4) 【あまり必要ない】(回答数4名)

1年生2名、未記入2名で、2名の回答を得た。記述内容の有効数は2名であった。

記述では、「保幼は義務ではないから」、「保育園と幼稚園は違うと思うから」という理由を挙げている。

次に、表3は「保幼小連携について学ぶ意義はありますか」(5段階尺度)という問いに対する回答の内訳を示している。

この結果から、必要性和同様、学年が上がる

表3 学年ごとの保幼小を学ぶ意義について

	1年生 (82名)	2年生 (78名)
とても意義がある	26名	52名
意義がある	39名	25名
どちらもない	16名	0名
あまり意義がない	1名	1名
全く意義ない	0名	0名

ごとにその重要性を感じていると言える。

次に、「保幼小連携を学ぶ意義」について理由を記述方式で訪ねた。その結果のなかから、児童教育コースの学生の記述内容をまとめる。

(1) 【とても意義がある】(回答数78名)

1年生22名、2年生45名、未記入11名で、67名の回答を得た。記述内容の有効数は66名であった。

1年生の記述では、「何となく」や、意義があると分かっている「小学校教諭を目指すから」からなど、義務感からくる記述が多い(6名)。2年生では、学ぶことで自己の指導力が向上する、知識のために学ぶ、などの記述が多い(13名)。また、「学ぶなかで分かる」や「低学年への指導に役立つ」という記述もある。しかし、1年生と同様、小学校教員になるから必要という記述も多い(10名)。

(2) 【意義がある】(回答数64名)

1年生34名、2年生22名、未記入8名で、56名の回答を得た。記述内容の有効数は55名であった。

1年生では、「わからないから学びたい」という記述が多くみられる(18名)。また、小学校教員になるからという記述も変わらず多い(9名)。2年生では、将来授業作りに役に立つ、子供理解のためにという記述が多い(10名)。しかし、免許を取得するからや、小学校教員として

必要という記述も多い（7名）。

(3) 【どちらでもない】（回答数16名）

1年生12名、未記入4名で、12名の回答を得た。記述内容の有効数は12名であった。記述では、「分からない」（10名）という意見が多かった。

(4) 【あまり意義がない】（回答数2名）

1年生1名、未記入1名で、1名の回答を得た。記述内容の有効数は1名であった。

記述では、「そこまで考えていないから」であった。

4 幼児教育と児童教育

中央教育審議会の初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会第7回（2022年3月23日）において、「幼児教育の質に関する社会や小学校等の認識の共有」について課題があるということが挙げられている。また、第8回会議にて、「受皿となる小学校以上の先生方の意識向上に向けてもう一押し欲しい。幼児教育の方ばかりが情報発信している印象を受けた。」とある。その中で、遊びを通じて学ぶ幼児期の特性の再確認を挙げるなど、相互の理解が不十分であるとしており、各園・小学校の強みを生かしながらどのように解決していけばよいか、幼児教育と小学校教育の接続期の教育がどうあるべきかを考えることが必要であるとしている。そのため、ここで幼児教育と児童教育の

違いについて、文献・指導要領等を比較しまとめていく。

(1) 幼児教育と児童教育の認識の違い

ここでは、幼児教育と児童教育の認識の違いについて文献を基に整理する。

木村（2019）は、「小学校の教育では、一般的に教師が教科書や教材を使用し内容を限定して「教える（教師）⇒学ぶ（子ども）」という直接的な構図となり学習形態として明確である。それに対し、幼児教育では、内容を限定して直接指導することはない。」としている。また、幼児教育は幼稚園教育要領にも示されるように、環境構成に保育のねらいや教師の願いを込めて展開するため、「限定的で直接的な指導を主とする小学校教師には、総合的で間接的な指導を行う幼児期の教育の意図を理解することは難しいのである。」としており、ここに不一致が見られ、「小学校の教育は、幼児期の教育の基礎である「環境を通して行う教育」という発想が希薄である。」と述べている。以上の関係について、以下の図4ようにまとめている。

現行の幼稚園教育要領では、第1章第1節幼稚園教育の基本3幼稚園教育の基本に関連して重視する事項として、「幼児期にふさわしい生活の展開」「遊びを通しての総合的な指導」「一人一人の発達の特性に応じた指導」の3点を挙げている。



図4 幼児教育と児童教育の構造の比較

（引用：木村光男（2019）「幼小連携における諸問題と背景」p. 256）

白神・周東・吉澤・角谷（2017）は、幼児教育に身に付けたいものと幼児教育に小学校教員が求めるものとの違いについて調査し、教育観、生活の自立、運動・健康指導の視点から整理している。その結果、教育観で「小学校教員は、英会話やひらがなの習得といった教科学習の側面の必要性を感じており、歌を歌う、絵を描くといった表現活動では保育者のほうが必要であると感じていた。」と述べており、教科の側面が強い指導内容については、大きな考えの違いがあるとしている。

文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課によると、「目標に関する位置づけ」「内容、時間の設定や指導方法等」に違いがあるとしている。「目標に関する位置づけ」では「幼児期の教育では、「～味わう」「～を感じる」などのように、いわばその後の教育の方向付けを重視する。一方、小学校教育は、「～ができるようにする」といった具体的な目標への到達を重視する。」としている。

「内容、時間の設定による指導方法等」では、「幼児教育は環境を通して行うことを基本とし、幼児を取り巻く人的・物的要因全てを通して幼児を導くことで、幼児の生活や経験からの学び、自発的な活動を重視している。」とし、「小学校教育では、各教科等から構成される時間割に基づく学級単位の集団指導が原則となる。」と述べている。

文部科学省（2021）によると、「教育課程の編成では、幼稚園教育要領に示された五つの領域の「ねらい」や「内容」をそのまま教育課程における「具体的なねらいや内容」とするのではなく、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮しながら、幼児の発達の各時期に展開される遊びや生活に応じて適切に具体化したねらいや内容を設定する必要がある。また、

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標でも、個別に取り出して指導するものではなく、遊びや生活を通して幼稚園教育において育みたい資質・能力が形成され、その結果として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のそれぞれの姿が幼児の姿として一体となって見られるようになるという意味であることを十分理解し、総合的に指導すること、さらに、各学年においてふさわしい遊びや生活を積み重ねることを通して育まれるようにすることが重要となる。」としている。

現行の小学校学習指導要領解説総則編では、第3章教育課程の編成及び実施 第1節1に以下のように示されている。

1 各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調和のとれた育成を目指し、児童の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

解説によると、「これらに掲げる目標」とは、学習指導要領を含む教育課程に関する法令及び各学校が編成する教育課程が掲げる目標を指すものである。「目標を達成するよう教育を行うものとする」の規定は、教育基本法第2条（教育の目標）、学校教育法第21条（義務教育の目標）及び第30条（小学校教育の目標）が、いずれも「目標を達成するよう行われるものとする」と規定していることを踏まえたものであり、児童が目標を達成することを義務づけるものではないが、教育を行う者は、これらに掲げる目標を達成するように教育を行う必要があることを示したものである。

以上のように、幼児教育は、環境を通して個別活動を多く行う。また、幼稚園教育要領等の目標が先にくるのではなく、今の幼児が何に興味を持っているか、どんな遊びをしているか、

その興味から何を育てられるかということを考え、遊びを中心とした活動が展開される。また、表現活動など自己表現の活動を主に行い、「～味わう」など教師の成長への願いが強く感じられる。

児童教育では、学習指導要領に沿って目標を設定し、目標到達を目的としている。そのため、幼児教育のように児童が今興味あることから必ずしも授業を展開できるわけではなく、日常生活を思い出す時間を作るなど、児童に興味関心を持てる工夫が必要になってくると考えられる。また、集団で授業を行うという違いもある。

指導法や考え方は、法律という面で見ても、幼児教育においては遊びから豊かになること、児童教育では目標を達成にさせることが、互いにとって当たり前であり、法的に拘束され義務であるがゆえに認識の違いが生まれることは当然であると言える。

(2) 幼児教育と児童教育の在り方の再考察

ここでは、今一度幼児教育と児童教育の在り方について再考察する。

第1に、小学校教育は授業内で興味関心が持てるように工夫することを先述した。それらを踏まえると、児童教育において授業を工夫することは、ただ児童に興味関心を持たせる工夫をしているのではなく、幼児期の興味関心から学ぶという経験を利用している一面もあるのではないかと考えられる。

第2に、小学校と幼稚園については学校という位置づけのため、どちらも教育課程が存在する。一方で、保育所においては、教育課程ではなく「指導計画」という言葉で表され、計画の立て方にも違いがある。

第3に、「保幼小連携」という言葉に対する筆者の疑問がある。先行研究や実践では、保幼小

の接続においてカリキュラムをつなぐ取組は散見される。「保幼小連携」や「保幼小接続」という言葉を直接的に受け取ると、保育所と幼稚園と小学校が並列した関係にある連携や接続というイメージをもつ。しかしながら、筆者が大学で受けてきた講義を通して、そもそも幼稚園と保育所を「保幼小〇〇」という言葉でひとつにまとめてよいのかという疑問が湧いた。また、保護者との関係についても両者間に差があるのではないかと感じている。後者の問いについては、保幼小接続や連携に関する資料を調べても表記がない。そのため、それぞれの違いを深く理解するために、幼稚園・保育所が何を目指しているか、幼稚園教育要領解説・保育所保育指針をそれぞれ並べてみる。まず、文部科学省が作成している「幼稚園要領と保育所保育指針の対比表」を引用・参考する。

【基本（原理）】

○幼稚園

（3歳以上の）幼児を保育し、適当な環境を与えて、心身の発達を助長するという目的（学校教育法77条）を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境（教育環境）を通して行う。

○保育所

保育に欠ける子に対し、家庭や地域社会と連携を図り、保護者の協力の下に家庭養育の補完を行う。乳幼児の最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進し、子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができるよう環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにする。養護と教育が一体になって、豊かな人間性を持った子どもを育成する。

幼稚園と保育所では、学校と児童福祉施設という違いがある。そのため幼稚園では、教育を強く行うが、保育所では、家庭養育の補完として養護という子どもの「生命の保持」と「情緒

の安定」を図るための援助を基盤として、それと一体として教育が行われる。そのため、保育所においては子ども一人一人の発達段階に合わせてきめ細やかな配慮の下での援助や関わりが求められる。(保育所保育指針解説「第1章2 養護に関する基本事項」p. 30)

以下は養護のねらいである。

<p>ア 生命の保持</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>① 一人一人の子どもが、快適に生活できるようにする。</p> <p>② 一人一人の子どもが、健康で安全に過ごせるようにする。</p> <p>③ 一人一人の子どもの生理的欲求が、十分に満たされるようにする。</p> <p>④ 一人一人の子どもの健康増進が、積極的に図られるようにする。</p>	<p>イ 情緒の安定</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>① 一人一人の子どもが、安定感をもって過ごせるようにする。</p> <p>② 一人一人の子どもが、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。</p> <p>③ 一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれていくようにする。</p> <p>④ 一人一人の子どもがくつろいで共に過ごし、心身の疲れが癒されるようにする。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【方法】

○幼稚園

教師による教育の在り方については(幼稚園教育の)基本として記述(上欄参照)しているほか、「指導計画作成上の留意事項」として示す。また、幼児の発達の過程を見通し、興味や関心、発達の実情に応じて、ねらい及び内容を設定し、具体的なねらいを達成するために適切なものとなるように環境を構成し必要な体験を得られるようにする。そのうえで、幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるように必要な援助を行う。

○保育所

「保育の方法」として留意点を示し、家庭、地域の生活実態を把握し、適切な保護、世話を行う。その上で、子どもの発達について理解し特性に応じ発達の課題に配慮した保育を行うと

もに、子どもの生活リズムを大切にし、生活の流れを安定させる。また、子どもが自発的・意欲的に関われる環境を構成し、子どもの主体的活動を重視し、遊びを通して総合的に保育を行い、子ども相互の関係づくりや集団活動を効果があるように援助していく。

幼稚園では、幼児を中心に考えられている。保育所においては、養護という特性を踏まえ、家庭、地域を基に子どもの保育を考えている。

【ねらい・内容等】

○幼稚園

ねらいは、幼稚園修了までに育つことが期待される心情、意欲、態度であり、内容はねらいを達成するために教師が指導する事項として、次の「5領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)」について、「領域の考え方」、指導上の「ねらい」、「内容」、「内容の取扱い」を示す。

○保育所

ねらいは発達過程区分ごとに保育の目標をより具体化したもので、子どもが身につけることが望まれる心情、意欲、態度であり、内容はねらいを達成するために保育士が行うべき事項として発達過程区分ごとに、「発達の特徴」、「保育士の姿勢と関わり方の視点」、「ねらい」、「内容」、「配慮事項」を示す。また3歳児以上は、生命の保持等に関する「基礎的事項」を示すとともに、幼稚園教育要領と同じ「5領域」について保育上の内容を示している。幼稚園では、3歳児以上で5領域を基本として行われる。保育所では、生命の保持とともに、5領域についても行う。保育所保育指針に示される5領域は、3歳以上については文言を一部変更して内容は基本的に同じだが、1歳以上3歳未満においては内容を一部年齢に合わせて変えている。さらに乳児保育というものもあり、これは「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近

なものに関わり感性が育つ」という3つで示されている。

【計画】

○幼稚園

・教育課程

幼稚園は意図的な教育を目的とする学校であり、幼稚園教育の目的・目標が達成されるよう教育課程を編成し、具体的なねらいと内容を組織し、入園から修了までの長期的な視野をもって配慮しなければならない。さらに、教育週数、教育時間が定まっている。

○保育所

・保育計画

入所している子どもの生活全体を通じて保育の目標が達成されるよう、全体的な保育計画を作成する。また、ねらい・内容を基に地域の実態、子どもの発達、家庭状況や保護者の意向、保育時間などを考慮して作成する。

幼稚園での教育週数は、特別な事情を除き39週を下回ってはならないとされ、1日の教育課程に係る教育時間は4時間を標準とし、幼児の心身の発達の程度や季節に配慮するものとしている。(幼稚園教育要領第1章第3節3(2)(3)p.79)

保育所の保育時間は、設備運営基準第34条により1日8時間を原則とされ、地域における乳幼児の保護者の労働時間や家庭状況等を考慮して、各保育所で定めることとなっている。(保育所保育指針第1章(1)イp.40) また、計画についても、幼稚園では意図的な教育を重視され、保育所では計画を作るとともに地域の実態や保護者の意向などが含まれる。

【子育て支援】

○幼稚園

「指導計画作成上の留意事項」の中で、幼稚園が子育て支援のために地域の人々に施設・機能

を開放し、幼児教育に関する相談に応じるなど、地域の幼児教育センターとしての役割を果たすよう努めることを求めている。

○保育所

「保育所における子育て支援」の中で、子育ての知識、経験、技術を蓄積している保育所が通常業務に加えて地域における子育て支援の役割を総合的かつ積極的に担うことを保育所の重要な役割とし、一時保育、地域活動事業、乳幼児相談等について例示している。

基本的にはどちらもすることは変わらないが保育所においては、児童福祉法に基づいて通常業務に支障をきたさない範囲で積極的に地域の子育て支援について行うよう、保育所保育指針の中で章立てして明記している。

以上を比べると、幼稚園、保育所でもかなりの違いがあることが分かる。保育所の保育時間と幼稚園の教育時間についても8時間と4時間という差があり、8:00登校、16:00下校である小学校と比べてみても6時間目までの授業で8時間、5時間目までの授業で7時間のため、この生活時間の差というのも子供にとっては慣れるのに時間がかかるのではないかと考えられる。また、保育所を見ていくと養護という側面もあるが、保護者との関わりが密接であり密接にするように保育所保育指針にも示されている。さらに目次を見ると、「第4章子育て支援」と子育て支援についても章立てされて書かれている。Web上の保育所保育指針解説において「保護者」という語を検索しても、322回使用されている。このことから、保育所は保護者との関わりが最も深いと言える。次いで、Web上の幼稚園教育要領において「保護者」という語を検索すると85回使用されており、幼稚園教育要領解説においても、家庭と密接に連携するようには示されている。最後に、小学校学習指導要領解説総

則編で同様に「保護者」と検索すると46回という結果になった。このことから、このような部分でも差があり、カリキュラムでの接続も重要であるが、このような学校の機能についても知るとともに、幼稚園・保育所ではどのような方法で保護者と繋がっていき、どのように教育・保育を行っていたのを知る必要があると考える。

5 保幼小についての総括と今後の在り方

ここまで述べてきた保幼小についての現状を総括する。その上で、今後の保幼小連携の在り方や大学生の間に身に付ける力について、筆者の考えを述べていく。

アンケート調査から学生の異校種理解について、保幼小連携の必要性や意義を感じていることが分かった。その反面、児童教育コースの学生の幼児教育についての理解が乏しいため、幼児教育を学ぶ機会があるとさらに小学校と幼稚園・保育所の両面から保幼小連携への理解を深く図れるのではないかと考えられた。また、学び方についても、調査の回答記述から、「小学校の先生になるから保幼小連携への理解が必要」という浅い解釈や義務感から学ぼうとする姿が多いことについて課題があることが分かった。

また、幼児教育と児童教育の違いについて整理すると、幼児教育は環境を通して個別の活動を多く行い、幼児の興味から何を育てられるかということを考え、遊びを中心とした活動が展開されることが分かった。また、表現活動など自己表現の活動を主に行い、「～を味わう」など教師の成長への願いが強く感じられた。一方、児童教育では、学習指導要領に準じて目標を設定し、目標到達を目的としていることに違いがあった。幼児教育においては、幼稚園と保育所で違いがないのかについても考察した。幼稚園は「学校」と「教育」という特性を持ち、保育

所は「福祉施設」と「養護と教育の一体化」という特性を持つことが分かった。さらに、保育所や幼稚園に子供が滞在する時間や保護者対応等の違いもあげられ、この部分については小学校の機能との違いについて理解が必要であることが課題だと分かった。

以上を踏まえると、保幼小連携・接続を行うためのカリキュラムの接続には、幼稚園だけでなく保育所の実態を知るなど、「学校」以外の施設についての理解も必要であることが分かった。また、近年共働き家庭が増えることで待機児童や保育所不足が問題となっている。そのことにより、短時間しか預けられない幼稚園の数は減少していつている。その裏で、幼稚園と保育所の特性を持ち、保護者の就労に関係なく入園できる認定こども園が増えている。今後も、立ち行かなくなった幼稚園や公立保育所がこども園にかわるなど、認定こども園が増加していくと考えられる。さらに、自治体の財政改革のため、認定こども園や公立保育所を民間運営にしていくな自治体も増えている。民営化されるということは、いかに保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領があったとしても、園に人を集めるための何か他とは違う性質や特徴を求めるようになると考えられる。このような変化の時代の中で小学校へ進学してくる児童は多様化するため、幼保小連携といっても幼児教育と児童教育で捉えるのではなく、幼稚園・保育所・認定こども園の各園所に関する幅広い知見や就学前の子供に対する理解が必要となっていく。

終わりに

筆者は、「小学校が楽しい」「小学校が好き」という児童を増やすことの思いを多くの人にもって欲しいと思う。「学校が楽しい場所」とい

う経験は、小学校入学後早ければ早いほど良い
 と思っている。近年問題になる不登校児の問題
 についてもこの保幼小連携がうまくいけば解決
 していくのではないかと考える。その理由とし
 て、楽しかったという経験が子供たちの学校に
 一度行けなくなった時の「あの時は楽しかった
 からもう一回学校に行ってみようかな」という
 学校と子供をつなぐ経験になると思うからだ。
 学校を好きになれる良い思い出の1年間になる
 ような学級づくりを教員になる誰もが行えるよ
 うになってほしい。そのためには、様々な学校
 種の理解は必要であり、子供を深く理解するた
 めにも、自身のコース外の科目を履修すること
 に意義はある。

最後に、来年度から筆者は小学校教員となる。
 保幼小連携にどれだけ関われるかは分からない
 が、大学4年間で学んできたことを生かし子供
 達が経験してきたことを大いに使い一人一人が
 輝き、朝は気持ちいい挨拶とともに、教室のド
 アを壊すくらいの勢いで楽しく学校に来てくれ
 る児童を増やす学校・学級づくりに勤しんでい
 きたい。

引用文献・主要参考文献

- ・一前春子（2017）『保幼小連携体制の形成過程』、風間書房
- ・今井康晴（2018）「小学校教諭を志望する学生の幼小接続の意識に関する一考察—幼稚園実習の振り返りを中心に—」『東京未来大学保育・教職センター紀要』第5号、pp. 19-27
- ・木村光男（2019）「幼小連携における諸問題と背景」『常葉大学教育部紀要』第39号、pp. 249-258
- ・白神敬介・周東和好・吉澤千夏・角谷詩織（2017）「幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違」『上越教育大学研究紀要』第37巻、第1号、pp. 49-56
- ・菅沼敬介（2021）「幼児教育での遊び経験を学びの自覚化へと促す生活科授業の研究—幼児教育の領域環境との関連を中心に—」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』第8巻、1号
- ・濱田祥子・松本剛太・八島美菜子・山崎晃（2019）「幼小接続カリキュラムの意義と課題—保育者と小学校教諭に対するインタビューから—」『比治山大学・比治山短期大学部教職課程研究』第5巻、pp. 24-33
- ・星野英五（2017）「保幼小の連携に即した音楽関連授業の考察—保育者の音楽意識調査から—」『名古屋芸術大学研究紀要』第38巻、pp. 249-255
- ・堀越紀香・白石佳子・原孝成・松崎洋子・塩野谷祐子・吉永安里・福田洋子・今井康晴・鈴木美枝子・横山真貴子（2015）「保育者養成校における「幼小接続」に対する学生理解の実態」『保育教諭養成課程研究』pp. 13-26
- ・山内信子・持田葉子（2017）「幼小接続期における音楽表現活動の検討」『聖和短期大学紀要』第2号、pp. 63-71
- ・杉山隆一（2021）「すすむ公立保育所の民営化と公の役割」、『月刊『住民と自治』』、2021年1月号
- ・文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課（2019）「特集Ⅰ解説 幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続に向けて 幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の推進」『初等教育資料』、2019年10月号
- ・厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説 平成30年3月』フレーベル館
- ・文部科学省（2021年2月）「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育展開」p. 33（幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）（mext.go.jp））【閲覧日：2022年8月31日】
- ・文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』フレーベル館
- ・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』